2017 年度

群馬大学教育学部　学部・附属学校連携室

教員養成 FD センター運営委員会
報 告 書

2018 年（平成 30 年）3 月

目次

Ⅰ．FD センター運営委員会の活動

1.　今日的要請に対応する学部･附属学校園の連携による FD 活動の推進　･･････ 2

2.　FD センター運営委員会の構成　･･････ 4

3.　2017 年度事業計画

(1) 学部教員宛の事業計画の案内内容　･･････ 4

(2) 対象事業　･･････ 5

(3) FD 参加登録および FD 発表登録　･･････ 5

(4) FD 参加報告様式　･･････ 8

Ⅱ．事業報告

1.　附属学校園・公開研究会　･･････11

2.　教育実習 A，C，D および幼稚園教育実習　･･････13

3.　附属小学校・自主公開研究会　･･････16

4.　附属学校園における大学教員の公開授業　･･････18

5.　附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会　･･････22

6.　新任教員 FD 研修会　･･････24

Ⅲ．活動報告

1.　FD センター 運営委員会の会議報告　･･････27

2.　新任教員の報告：学び続ける教師を目指して（大谷　龍二）　･･････29

3.　新任教員の報告：新任研修を終えて（楠元　一臣）　･･････34

4.　FD 発表の報告：附属学校をはじめとした小中学校での授業実践のポイント
（河内　昭浩）･･････36

5.　運営委員の報告：新任教員 FD 研修会発表内容から
-附属小学校における生活科の研究報告-（関　貴充）･･････38

6.　運営委員の報告：新任教員 FD 研修会発表内容から
-附属小学校及び附属特別支援学校公開研における研究報告-
（豊岡　大画）･･････41

Ⅳ．FD を通して大学教員と附属学校園が連携することの意義　･･････44
- 編集後記に代えて -

Ⅰ．FD センター運営委員会の活動

1. 今日的要請に対応する学部・附属学校園の連携による FD 活動の推進

教員養成 FD センター長　　吉田　浩之

2006 年 7 月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方懇」の中では，「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない，教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い，学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘されました。また，国立大学法人の第 1 期中期目標期間終了を踏まえ，2009 年 6 月 5 日の文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では，「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されています。

このような背景を受け，本学教育学部では，当時の運営委員会が，教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適した FD プログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し，2011 年 4 月から「教員養成 FD センター（以下，「FD センター」）がスタートしました。

その後も大学教育改革，特に教員養成学部についての提言が次々と出されています。例えば，2013 年 5 月の教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」では，「初等中等教育を担う教員の質の向上のため，教員養成大学・学部については，量的整備から質的充実への転換を図る観点から，各大学の実態を踏まえつつ，学校現場での指導経験のある大学教員の採用増，実践型のカリキュラムへの転換，組織編成の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。学生の学校現場でのボランティア活動を推進する等，大学と学校現場との連携を強化する。文部科学省は今後行われる小学校教員免許の改訂や大学院の教職大学院化に伴い，附属学校園との連携による積極的な研修を通した教育実践的な教員を強く求める。」等が提言されました。

さらに，2017 年 8 月の国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では，「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして，「国立教員養成大学・学部において，研究者教員が一定期間，学校現場での教育実践研究の経験を積むことや，学校現場との共同研究を実施すること等について，時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等，教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより，実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと。」が示されています。

また，群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも，FD センターに関する計画として「FD センターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について検討する。（2016 年度）」が明記され，本年度（2017 年度）は「FD センターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について試行する。」

とされています。

このような提言や計画等からは，教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることがうかがえます。

一方で，上記で求められているような研修に該当する機会は，学部・附属学校園が連携する活動の中に，すでに少なからずみられます。たとえば，附属学校園の公開研究会や教育実習，学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等です。そこで，それらにFDの視点で大学教員が参加し，自らの教育内容・方法や教育実践に資する学びや気づき等を記録・報告する仕組みつくることで，実践的なFDの機会になるよう，FDセンターでは，事業計画を構想しました。

そのようなFD活動を推進するに当たり，学部教員へ次のような案内をいたしました。

学部･附属学校連携室教員養成FDセンター（以下，FDセンター）は，「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し，教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し，教育･研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。

現在，附属学校園と連携した活動を行っておられる先生は多いと思います。そのような附属学校園と連携した活動には，実質的に FD 活動に該当するものが少なからずみられます。そこで FD センターでは，附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものについて，FD に位置づけ，それを推進することを本年度の重点取組としました。たとえば，附属学校園における公開研究会について，FD の視点による教員研修の位置づけ（事業計画化，事前案内等）と枠組み（規定様式の報告書提出によるFD参加登録，報告書の管理等）を設けることで，FD参加の機会となり得ます。

これによって，昨年度から実施された「教員評価」においても，学部・附属学校園の連携活動が「FDへの取組」に該当することが明確化されることになります。

本年度の重点取組の推進によって，FD センターの目的の達成をはじめ，学部と附属学校園の連携活動が一層活発になっていくように，ご理解とご協力の程，宜しくお願いいたします。

なお，具体的には，添付しました「学部･附属学校園連携による FD 活動（案内)」「FDセンター事業計画（概要）2017年度」「FD参加報告書（様式1～3)」をご覧頂ければと思います。

本年度，学部教員提出の FD 参加報告書数をみると，公開研究会に関する報告書数は 68，教育実習に関する報告書数は 27，授業公開・研修会に関する報告書数は 25，合計 120 となり，新規の取組としては，一定の成果を得ることができました。今後は，本年度の取組の一層の推進と充実を図り，学部教員に実践的なFDの機会をよりよく提供するとともに，学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業をすることが当たり前の光景になることに，貢献していくことができるように努めていきたいと考えています。

2.　FD センター運営委員会の構成

センター長	教育学部准教授（臨床総合センター）	吉田　浩之
副センター長	附属小学校副校長	今井　東
センター運営委員（専任）	附属小学校教諭	関　　貴充
	附属小学校教諭	豊岡　大画
センター運営委員（兼任）	教育学部教授（臨床総合センター）	黒羽　正見
	教育学部教授（技術教育講座）	本村　猛能
	教育学部教授（理科教育講座）	日置　英彰
	教育学部准教授（家政教育講座）	前田亜紀子

3.　2017 年度事業計画

(1) 学部教員宛の事業計画の案内内容

教育学部 教員各位

学部・附属学校連携室
教員養成 FD センター運営委員会

学部・附属学校園連携による「FD 発表」および「FD 参加」について

学部・附属学校連携室教員養成 FD センター（以下,「FD センター」）は,「学部と附属学校が連携して組織的な研修を実施し，教員養成に携わる教員としての自覚を涵養し，教育・研究指導能力の向上を図る」ことを目的としています。その活動内容は「(1) 教育支援についての企画・開発に関すること，(2) 研修の実施に関すること，(3) その他 FD センターの目的を達成するために必要な事項」と規定されています。

現在，学部と附属学校園による連携した活動を行っておられる先生は多いと思います。そのような活動には，実質的に FD 活動に該当するものが少なからずみられます。そこで FD センターでは,附属学校園と連携した活動で FD 活動に該当するものについて,FD に位置づけ,それを推進することを本年度の重点取組としました。たとえば，附属学校園における公開研究会への参加については，FD センターとして FD の視点から，教員研修の位置づけ（事業計画化，事前案内等）と枠組み（規定様式の報告書提出による FD 参加登録，報告書の管理等）を設けることで，FD 参加に該当するようにします。また，学部教員で附属学校園の児童生徒に授業を行うことについても，FD の視点から，授業公開と授業参加を案内し，FD 発表と FD 参加に位置づけるようにします。これによって昨年度から実施された「教員評価」においても，FD センターによる学部・附属学校園の連携活動が「FD への取組」に該当することが明確化されることになります。

群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」では，「FD センターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について検討する。」ことが明記されており，本年度は「FD センターを活用して，研究者教員が学校現場での指導を経験するための FD について試行する。」ことが計画に示されてあります。附属学校園における現場指導をやってみたいけれどどうしてよいかわからない，あるいは学校現場の教育課題解決のために自らの専門性をどう活かしてよいかわからない，といった先生方へのサポートも FD センターで取り組みたいと考えています。

本年度の重点取組の推進によって，FD センターの目的の達成をはじめ，学部と附属学校園の連携が一層活発になっていくように，ご理解とご協力の程，宜しくお願いいたします。

なお，「FD センター事業計画（概要）2017 年度」と「(別紙) FD 参加報告書（様式 1～3)」を添付いたしましたので，ご覧頂ければと思います。

また，FD センターが担当する対象範囲は，学部と附属学校園の連携による内容で，事業計画化した内容になります。ご理解の程，宜しくお願いいたします。

(2) 対象事業

① 附属学校園・公開研究会（FD 参加）

期日：幼稚園（6 月 1 日，10 月 28 日），小学校（6 月 9，10 日），中学校（6 月 1 日，9 月 7，8 日），特別支援学校（6 月 30 日，11 月 10 日）

② 教育実習 A，C，D および附属幼稚園教育実習（FD 参加）

期間：教育実習 A，C，D および附属幼稚園教育実習の全期間

③ 附属小学校・自主公開研究会（FD 参加）

期間：11 月～2 月

④ 附属学校園における大学教員の授業（授業者は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：附属学校園の計画による

⑤ 附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加） 期日：附属学校園の計画による

⑥ 新任教員 FD 研修会（講師は FD 発表，参加者は FD 参加）

期日：FD センターにより年間適宜設定する

(3) FD 参加登録および FD 発表登録

FD として参加したことの登録（以下，「FD 参加登録」）を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式(対象事業ごとに 3 種類)に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。また，「教員評価」の「FD 参加」の資料として事務局（学校教育臨床総合センター）で保管いたします。

①　附属学校園・公開研究会の場合

附属学校園における公開研究会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，2 日間連続で開催される 1 つの公開研究会に，2 日間参加した場合については，1 つの公開研究会で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば，附属小学校公開研究会（2 日間開催）に，1 日の参加で 1 回のカウント，2 日間ともに参加した場合でも 1 回のカウントとなります。

②　教育実習の場合

教育実習期間で，学生の授業等を参観し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 2 に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，1 つの教育実習の期間中で複数回の参観日があった場合については，1 つの教育実習で FD 参加登録のカウントは 1 回となります。たとえば，教育実習 A で 1 回，教育実習 C で 1 回となります。

③　附属小学校・自主公開研究会の場合

附属小学校・自主公開研究会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 1 に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，1 つの自主公開研究会に参加ごとに FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

④　附属学校園における大学教員による公開授業の場合

授業者の大学教員は，FD 発表となります（当該授業を学部教員に事前に案内する）。また，授業を参観し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。なお，同じ授業者による同じ内容の授業が複数回実施され，その授業を複数回参観した場合には，FD 参加登録のカウントは 1 回となります。

⑤　附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会の場合

各附属学校園単位以上で，教員研修会として位置づけ開催した研修会の担当講師の大学教員は，FD 発表となります（当該教員研修会を学部教員に事前に案内する）。また，研修会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，学校教

育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。

⑥　新任教員 FD 研修会の場合

研修会では，学部･附属学校園の連携活動に関連する内容を取り上げ，また附属学校園の教員がメンバーとして参加し意見交換等を行うため，FD として有意義な機会となります。主として新任教員を対象としていますが，それ以外の学部教員へも参加を案内いたします。研修会で講師の大学教員は，FD 発表となります（当該研修会を学部教員に事前に案内する）。また，研修会に参加し，FD 参加登録を希望する場合は，所定の FD 参加報告用の様式 3 に記述し，学校教育臨床総合センター事務補佐員まで，メール添付（あるいは様式に記述し紙媒体）で，参加した期日から 2 週間以内に提出し，それによって，FD 参加登録となります。

(4) FD 参加報告様式（1～3）

様式１　FD 参加報告用（公開研究会）

学部・附属学校連携室 教員養成 FD センター宛

提出先：

学校教育臨床総合センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：平成＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・附中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業名（1 つ），あるいは 講演タイトル名

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※ 授業を記述の場合　：〇年〇組，教科，タイトルなど。保育参観の場合は学級名。

※ 講演会を記述の場合：講演のタイトル名。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

様式２　FD 参加報告用（教育実習）

学部・附属学校連携室 教員養成 FD センター宛

提出先：

学校教育臨床総合センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：平成＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・荒牧小・桃川小・附中・伊三中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業名（1 つ）

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※ 〇年〇組，教科名，タイトルなど。保育参観の場合は学級名を記入ください。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

様式３　FD 参加報告用（公開授業・教員研修会）

学部・附属学校連携室 教員養成 FD センター宛

提出先：

学校教育臨床総合センター

事務補佐員　品川仁美

E-mail: h-shina@gunma-u.ac.jp

提出日：平成＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日

大学教員名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☐ 参加事業：附幼・附小・附中・附特　（〇で囲む）

☐ 参加期日：＿＿＿月＿＿＿日

☐ 参観授業（1 つ），あるいは 研修会名

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

※ 授業の場合　：〇年〇組，教科名，タイトルなど。

※ 研修会の場合：タイトルなど。

教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点など ※字数任意

Ⅱ．事業報告

1.　附属学校園・公開研究会

FD センター運営委員　　前田 亜紀子

(1) 事業概要

開　催　日	学校種／共催	事　業	内　容
平成 29 年６月１日	附属幼稚園	公開研究会	公開保育と全体会 保育を語る会
平成 29 年６月１日	附属中学校	ミニ公開研究会	公開授業と研究会 文部科学省講演
平成 29 年６月 30 日	附属特別支援学校	公開研究会	公開授業と研究会 シンポジウム
平成 29 年６月９，10 日	附属小学校	公開研究会	公開授業と研究会
平成 29 年９月７，８日	附属中学校	公開研究会	公開授業と研究会 文部科学省講演 学校保健実践研究会
平成 29 年 10 月 28 日	附属幼稚園	公開研究会	公開保育と講演会 保育を語る会
平成 29 年 11 月 10 日	附属特別支援学校	授業公開及び研究会	
平成 29 年 11 月 14 日～ 平成 30 年１月 29 日	附属小学校	提案授業及び研究会	校内研究会

(2) 報告

参加報告数は全 68 件であり，公開研の校種別内訳は，附属幼稚園 5 件，附属小学校 25 件，附属中学校 29 件，附属特別支援学校 4 件であった。加えて，公開研と同日開催の文部科学省講演会 3 件，特支シンポジウム 2 件の報告があった。

記述内容から，指導助言者や研究協力者の立場ではない参加が 25 件（36%），提出者の所属講座から，異なる教科や領域への参加が 15 件（23%）あった。専門分野や教科の枠を越えた参加があること，ならびに公開研究会や講演会，シンポジウムは，FD の一環として附属学校園との教育，研究活動を往還する有意義な事業であると言える。

記述欄「教育の内容および方法等に関連して参考になった点や，参加してよかった点」のテキストデータを計量テキスト分析のフリーソフト「KH Coder」を用いてデータ化した。

総抽出使用語数は 9,058 語であり，１報告書あたりの記述文数は 4.1 文であった。出現回数が高い「抽出語（回数）」の順に，「授業（164）」「研究（73）」「指導（48）」「学習（41）」「教育（40）」となった。これらはすべてサ変名詞であった（「～する」が後ろに付くと動詞

化する名詞)。出現回数が高かった名詞(回数)は,「生徒」「英語」(ともに31),「課題(29)」「小学校(24)」「教員(21)」「教科(20)」であった。FDの参考となる記述例を掲げる。

○ 頻出語に関連した記述例

・それぞれの教科には独自の「見方・考え方」がありますので,今後の教員養成においては,各教科独自の目標と同時に教科横断的な視野を持った教科指導が今後さらに必要なことが体験できました。
・新学習指導要領が公示されて初めての公開研であったため,研究授業もそうであったが,授業研究会において研究授業を新学習指導要領に沿って議論できたことがよかった。
・学生が教育実習等で教員の授業を観察参加する場合に,目前の児童の様子に至るまでのプロセスに目を向ける視点が具体的に持てるように,学部授業おいて留意して指導を行いたい。

○ 「参考」という抽出語の記述例を要約

・学習形態や本時の課題への到達度などをどのように評価するか。
・表や写真資料の工夫による課題解決型授業として。
・児童の学習を活性化させる動線つくり,児童の視線を教員に集める学習環境の構成。
・授業実践例が少ない題材例として,またそれに対する課題や改善点などの意見。
・ノートパッドで写真をとり,教室内のモニターに写す機能の活用など,最先端のIT機器を上手く使いこなしていた点。

(3) 成果,次年度に向けて

新学習指導要領では,「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」が求められている。これは各教科で,どのような力が身につき,学ぶ意義は何かを明確にすることで,「何を学ぶか」から,「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」への意識改革である。教員は,知識や技能の定着が中心だった指導から,様々な課題を解決できる力を育成するための過程を重視した学習環境を提供する必要がある。

附属学校園の公開研究会,講演会,シンポジウムは,こうした変化に対応した質の高い授業や教材開発,研究成果を参観できる貴重な機会である。参加をきっかけに,大学教員とのさらなる往還が生まれ,教科や専門の枠を越えた取り組みに発展することが期待される。FD委員会の役割は本来そこにある。大学教育の授業改善や授業力向上に役立つ活動を構築していくため,アイデアや要望も委員会ではお待ちしている。

2.　教育実習A，C，Dおよび幼稚園教育実習

FDセンター運営委員　　黒羽　正見

（1）事業概要

ＦＤ教育実習参観で教員自らが主体的な気付きを求めようとすることが，本事業の目指すところでもあります。今年度は，下図の通り，ＦＤ教育実習参観がありました。

（＊参観内容は，ＦＤ参加報告用紙を参考）

実習区分	実習協力校	参観日	参観内容
幼稚園	附属幼稚園	H.30.1.29	保育参観
小学校	附属小学校	H.29.9.11	6年2組，算数「樹形図を使って説明しよう」
		H.29.9.15	3年3組，算数
		H.29.9.21	4年3組，社会
		H.29.9.22	4年3組，国語「ごんぎつね」
		H.29.9.25	2年1組，図画工作
		H.29.9.26	2年，国語「お手紙」
		H.29.10.3	理科「身の回りの物質，水溶液」
		H.29.10.5	6年1組，理科「てこの働きを調べよう」
	荒牧小学校	H.29.10.4	2年4組，国語「読んで考えたことを話そう」
		H.29.10.4	5年1組，理科「生命のつながり」
	桃川小学校	H.29.10.3	3年2組,音楽「曲にあった歌い方を見つけよう」
中学校	附属中学校	H.29.9.5	1年4組,音楽「和音に合わせて旋律をつくろう」
		H.29.9.25	1年，音楽「合唱」
		H.29.10.1	2年1組，社会「中国・四国地方の過疎地域の地域おこし案を考えよう」
		H.29.10.2	3年3組，国語「故郷」
		H.29.10.3	2年1組，音楽「和音の音を使って旋律をつくろう」
			3年2組，理科「酸・アルカリとイオン」
			2年3組，家庭「よりよい消費生活を送ろう」
			2年1組，理科「行動のしくみ」
			3年4組，英語「program　6」
	伊勢崎第三中学校	H.29.9.28	2年6組，技術「エネルギー変換に関する技術」
		H.29.10.2	3年1組，保健体育「球技」
		H.29.10.4	1年5組，理科「水に溶ける物質の様子」

(2) 報告

参加報告件数は全 27 件であり，校種別内訳は，附属幼稚園 1 件，小学校 12 件（附属小学校 9 件，荒牧小学校 2 件，桃川小学校 1 件），中学校 13 件（附属中学校 10 件，伊勢崎第三中学校 3 件），附属特別支援学校 1 件の報告があった。

報告用紙の「教育の内容および方法等に関連して参考になった点や参加して良かった点」に関した記述内容を大別してみると，儀礼内容（用務のみ），指導方法，教材研究，学生理解（成長），授業改善，教員自身の省察等に分けられる。

ここで，ＦＤ教育実習参観をした二人の教員の報告内容を取り上げる。実習生の授業実践に本当の意味で参観している。すなわち，一つは「参加している。学生と一緒に活動しているつもりで丁寧に観ている。一つ一つの活動を洞察・解釈している。その授業を説明している。同時に，学生の本時の授業目標の達成状況を生徒の事実からしっかりと見取っている。その達成状況の指導方法を吟味・検討している。温かいまなざしで学生を見守っている。」と。

もう一つは，教育実習は，学生指導の場であると同時に，「学部教育反省の場」という位置づけを自覚している。自分が学生に教えてきたことが教育実習という「現場」で，どのように生かされているかという事実を実際に目にすることによって，さまざまな気付きや葛藤が生じさせ，「自分は教員として学生の能力を引き出すにはどうすればよいか」という主体性を高めている有りようである。

****

○　学習内容は，溶解度と再結晶で「水溶液から溶質を取り出す実験を行い，その結果を溶解度と関連付けてとらえること」であった。結晶が出てくる理由は何だろうか？という課題に対して，予想を立て，100ｇの水（80℃）にホウ酸（20ｇ）を溶かして，氷水で冷却して結晶が出てくるかを確認する実験を行い，結果を考察した。

生徒は，よく取り組んでいた。前時の確認をしながら授業を進めたこと，予想をする場面では３つのステップで考えさせたこと，課題を答えに正対させるために具体的な表現にしたことなどの工夫により，生徒は無理なく予想ができた。生徒の実態を踏まえた工夫が奏功したようである。考察もほとんどの生徒ができていた。実習生の○○君は，字がきれいで板書が上手であった。声も大きく丁寧な授業を展開した。

実習校の校長先生をはじめ，教頭先生，担当の先生からもお褒めの言葉をいただきました。実習校には 2 名の教育実習がお世話になっているが，二人とも評判がよく，実習校から感謝された。二人とも実習に積極的によく取り組んでいる様子を窺うことができた。この実習がよい経験になったと思う。

○　実習生の授業の様子を参観することで，実際の教育現場における教師と子どもの関わりについて理解を深めることができ，大学での指導について参考となるところが多かっ

た。参観した授業でよく取り組めていたことは，以下の諸点である。

① 教師による一方的な説明ではなく，子どもと対話しながらの授業ができていた。
② アクシデント（黒板とワークシートの登場人物名が異なる）にも，落ち着いて対処できていた。
③ タイマーを使いながら，作業時間の管理がしっかり行えていた。これは，指導の先生の影響かもしれない。個人やグループでの作業の際も，「残り〇分」と声をかけ，子どもたちの集中を促せていた。
④ 途中で少し急いだところもあったが，時間通りに授業を終えることができていた。
⑤ 授業のまとめを，子どもたちに発言させながら確認できていた。
⑥ 黒板を１枚で（途中で消して，上から核ということがなく）終えられていた。そのため，「めあて」と「まとめ」の対応が見やすくなっていた。ただ，「めあて」と「まとめ」の対応にややズレがあったので，その点の改善が図れるとなおよいと思われる。

(3) 成果・次年度に向けて

現在，教育実習では二つの課題がある。一つは県教委との連携を基盤としても，学校現場の多忙化や働き方改革等の影響から，県内各市町村小中学校の教育実習生の受入関係が崩れてきている。

もう一つは，多様化して精神的に不安定な学生が数多く在籍しており，実習先で症状がでた場合のメンタルヘルスの対応が強く求められている。このような課題を解決して，教育学部の質保証を実現していくためには，われわれ大学教員が，学校現場と教育委員会から信頼されることが大前提となる。そこでまず，学生に信頼される大学教員でありたい。毎年，本学部の教育実習は，全教員参加，研究授業でなくとも実習状況をみに行くという，教員一人一人が学生一人一人を大切に思っている事実を伝えることから始めている。

今年度からの「ＦＤ教育実習」の取組は，学部教員一人一人の主体性を高め，その結果，教育学部としての組織力を着実に高めることに繋がっている。教員が意欲的に教育・研究に取り組み，学生がその教員の熱意を受けながら，「教師になりたい」という目標に向かって日々努力し続けることを実現するためにも，さらに積極的なＦＤ教育実習への参加を期待したい。

3.　附属小学校・自主公開研究会

FD センター運営委員　　関　　貴充
FD センター運営委員　　豊岡　大画

(1) 事業概要

実施日	授業者	授業学級	教科等
平成 29 年 11 月 6 日	猿谷教諭	１年１組	道　徳
平成 29 年 11 月 14 日	下田教諭	１年２組	算数科
平成 29 年 11 月 14 日	小杉教諭	５年３組	総合的な学習の時間
平成 29 年 11 月 20 日	桒原教諭	３年２組	体育科
平成 29 年 11 月 20 日	長嶋教諭	６年１組	国語科
平成 29 年 11 月 21 日	芹澤教諭	２年１組	生活科
平成 29 年 11 月 21 日	中里教諭	６年１組	家庭科
平成 29 年 11 月 29 日	中原教諭	５年２組	図画工作科
平成 29 年 11 月 29 日	正田教諭	６年２組	英語科
平成 29 年 12 月 1 日	内田教諭	４年２組	道徳科
平成 29 年 12 月 1 日	谷田部教諭	３年２組	社会科
平成 29 年 12 月 4 日	天田教諭	５年３組	音楽科
平成 29 年 12 月 4 日	近藤教諭	５年２組	国語科
平成 29 年 12 月 5 日	糸井教諭	５年３組	算数科
平成 29 年 12 月 8 日	野村教諭	４年１組	体育科
平成 29 年 12 月 8 日	針谷教諭	６年３組	理　科
平成 30 年 1 月 18 日	豊岡教諭	５年３組	図画工作科
平成 30 年 1 月 18 日	佐藤教諭	４年１組	社会科
平成 30 年 1 月 24 日	井上教諭	４年２組	理　科
平成 30 年 1 月 26 日	髙山教諭	４年３組	総合的な学習の時間
平成 30 年 1 月 29 日	小暮教諭	２年２組	道徳科
平成 30 年 1 月 29 日	髙橋教諭	５年１組	英語科
平成 30 年 2 月 6 日	中里教諭	５年２組	家庭科
平成 30 年 2 月 6 日	根岸徹教諭	３年１組	算数科
平成 30 年 2 月 7 日	関教諭	１年３組	生活科
平成 30 年 2 月 7 日	稲森教諭	３年３組	音楽科
平成 30 年 2 月 8 日	根岸恵子教諭	２年３組	体育科
平成 30 年 2 月 8 日	桐生教諭	３年３組	国語科

(2) 報告

来年度の公開研究会に向けて，全体研究「未来を拓く子どもの育成＜二年次＞～子どもが学びの自覚をする授業改善～」を基に，各教科等部において育む資質・能力の育成に向け，「学びに向かう力」，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」の三つの柱が相互に関係し合うことを活性化することができるよう，学びの自覚の面から問題解決的な学習における授業改善を進めた。その中で，授業と研究会の実施を行い，研究の見直しを図った。各教科等部の育成を目指す資質・能力を以下に示す。

教科等	育成を目指す資質・能力
国語科	論理的な思考を土台とし，自ら考えを深める資質・能力
算数科	数学に関わる自走について数学的に考える資質・能力
社会科	社会的事象への深い理解を基に，自ら社会参画する資質・能力
理　科	自然事象を科学的に探究できる資質・能力
生活科	思いや願いの実現に向けて，対象に関わり続ける資質・能力
音楽科	聞き取ることと感じ取ることを繰り返し，音や音楽と豊かに関わる資質・能力
家庭科	身に付けた知識や技能を基に生活をよりよくしようと工夫する資質・能力
図画工作科	形や色，イメージなどの視点をもち，生活や社会と関わる資質・能力
体育科	運動に親しみ，楽しく明るい生活を営む資質・能力
道徳科	自らの道徳的価値観を基にした，よりよく生きる基盤となる資質・能力
英語活動・英語科	他者に配慮しながら主体的に英語を用いて伝え合い，コミュニケーションを図る資質・能力
総合的な学習の時間	他者と協働して新たな課題に自ら挑み続ける資質・能力

(3) 成果，次年度に向けて

授業実践だけでなく，研究会を行うことで授業の省察や研究の見直しを図り，授業や研究の修正をすることができた。また，授業や研究を進めるにあたり，大学の先生とも相談をしながら実践することができた。来年度の公開研究会で，全県に研究と授業を公開するため，今後も継続して行っていきたい。

4.　附属学校園における大学教員の公開授業

FD センター運営委員　　関　　貴充
FD センター運営委員　　豊岡　大画

(1) 事業概要

実施日	授業者	対象	授業名
平成 29 年 6 月 27 日，28 日	佐野史教授	附中学校 3 学年 ・4 クラスで実施	「体細胞分裂の観察実験」（理科）
平成 29 年 7 月 13 日	河内昭浩准教授	附中学校 2 学年 ・学年全体一斉実施	「読書感想文を書こう」（国語）
平成 29 年 7 月 18 日	河内昭浩准教授	附小学校 3 学年 ・3 クラスで実施	「読書感想文を書こう」（国語）
平成 29 年 10 月 23 日，26 日	佐藤綾講師	附中学校 2 学年 ・2 クラスで実施	「脊椎動物の仲間の体温」（理科）
平成 29 年 11 月 8 日	河内昭浩准教授	附中学校 2 学年 ・学年全体一斉実施	「通時コーパスを活用した古典の授業」（国語）
平成 29 年 11 月 30 日	河内昭浩准教授	附中学校 3 学年 ・学年全体一斉実施	「進路国語対策講座」（進路）
平成 29 年 12 月 4 日，7 日	日置英彰教授	附中学校 3 学年 ・4 クラスで実施	「くすりを望みの場所に運搬するードラッグデリバリーシステムー」（理科）
平成 29 年 12 月 19 日	伊藤隆教授	附中学校 3 学年 ・学年全体一斉実施	「円周率について」（数学）
平成 30 年 1 月 15 日	青木悠樹講師	附中学校 1 学年 ・4 クラスで実施	「音の性質」（理科）
平成 30 年 1 月 16 日～19 日	菅生千穂准教授	附中学校 1，2 学年 ・各学年 2 回実施	「箏に親しもう」（音楽）
平成 30 年 1 月 31 日	河内昭浩准教授	附中学校 1 年 3 組	「言葉がつなぐ世界遺産」（国語）
平成 30 年 2 月 14 日	石井基裕講師	附中学校 1 学年 ・4 クラスで実施	「ヤング図形であそぼう」（数学）
平成 30 年 2 月 14 日	矢島正教授	附小学校 4 年 2 組	「楽しい音読劇を作ろう」（国語）

(2) 報告

公開授業の実施回数は，31 回であった。公開授業の参加報告書から，主な記述内容は，以下のとおりである。

・国語講座河内昭浩准教授の授業を参観してきた。～「何をどう書けばいいか，まったくわかりません。」という人のために～という子ども目線からの導入で子どもたちの興味を引いた。読書感想文についての書き方の説明が丁寧であった。手順を踏んでおり，分かり易く，何をどうすればよいのかが明確に示され，子どもたちが取り組み易くなるように工夫されていた。指示が明確かつ的確であれば，子どもたちはすぐ行動に移せるという見本だと感じた。考える場面，考えを表現する場面，考えを発表する場面，みんなで共有する場面等が設定されており，落ち着いた雰囲気の中で深い学びのある授業が展開されていた。子どもへの話し方や話のペースに配慮が見られた。また，授業で扱った文章の感想文の模範も示されたのもよかった。子どもたちもこの授業を受けて，おそらく自信がもてたものと確信する。是非参考にしたい授業である。また授業の最後に，今年の課題図書（高学年）4 冊の紹介があった。うち 2 冊は，丁寧な説明があった。時宜に適した内容であり，児童も興味をもって聞いていた。

「河内准教授の授業の様子」

・教育学部国語教育講座・河内昭浩先生の授業を参観した。児童に対して，具体的な問いを発しながら，適切に導いている様子に感銘を受けた。「読書感想文の書き方がわからない」ということを前提に授業を展開しており，どのような視点をもって本を読めば，感想文が書きやすくなるか，大変明快に説明されていた。特に，「自分の生き方や経験と本の世界を照らし合わせる」という視点は，より深い読みにつながるものであろうと感じた。

・顕微鏡の使い方をどのようにすることで学習者の理解が深まるかが分かった。

・子供の実態と科学概念を形成させるため，また深い理解を図る知識の活用を行うための工夫点を知ることができて参考になった。

・タブレットをどのように活用することで学習者の理解が深まるかが分かった。

・近年，安価になっている赤外温度計画像を利用し，変温動物・恒温動物の表面温度と外気温の関係を中学生に解析させ，グラフ化する授業内容であった。最新の IT 機材で得られる情報を効率よく活用する点が参考になった。変温動物と恒温動物の環境に対する体温の違いに関して，サーモグラフィーを使った授業を行い，実際のデータを学習者に見せることで考えさせる授業であった。

・変温動物と恒温動物の環境に対する体温の違いに関して，サーモグラフィーを使った授業を行い，実際のデータを学習者に見せることで考えさせる授業であった。

・タブレット端末にサーモグラフィーカメラを装着し，体温を可視化する演示にたいへん感銘を受けた。動物のサーモグラフィー写真をタブレット端末で見ながらデーター解析を行うことで生徒にとって楽しく理解しやすい授業となったと感じた。

・理科講座の佐藤綾講師の授業を参観してきた。動物の体温をサーモカメラで撮影し，教材化した授業であった。鳥類，は虫類，両生類，魚類をそれぞれ２種類ずつ撮影していた。画面に気温と体温を表示させ，大変分かりやすい画面となっていた。生徒は，ｉＰａｄで（各班２台）画像を見ながら，表またはグラフで記録をし，体温が気温に関係なく一定に保たれる動物（恒温動物）と体温が気温とともに変化する動物（変温動物）があることを，理解したようである。まとめにもきちんと考察を書いていた生徒は多かった。このような佐藤先生の工夫はすばらしいと思った。特に生物関係の観察は，季節や天候に左右され何かと制限されがちだが，画像に保存しておけばその欠点を補えることが分かった。画像もよくとれており，動物の体温と気温が簡単に把握できる点が特によかった。

・理科講座の青木悠樹講師の授業を参観してきた。青木先生は，音の伝わり方についてタブレット端末を使用し，その様子を分かり易く直感的にとらえさせる工夫をしていた。音の大きさと高さの違いが，振幅と振動数の違いによることなどをよく理解することができる教材であった。オシロスコープの原理にも触れていたが，音の伝わり方をイメージするには大変良い教材であると思った。多くの生徒は音の伝わり方を理解したようだが，中には理解できていなかった生徒もいた。生徒の理解に差があることが分かった。欲を言えば，開発したソフトの使い方の指示が，もう少し丁寧であれば（使い方にもう少し具体的な指示があれば），生徒はもっとこの教材を使いこなせたかも知れないと思う。この教材の良さをアピールできるための工夫がもう少しあると良かったと思う。理解を深めるためのイメージ作りには，今回のような IT を使った教材は大変効果的であると思います。

・タブレットと仮想現実を利用して，音の性質を可視化することで生徒の理解を深めることを狙った授業であった。可視化することの利点が示された授業であった。その一方，タブ

レットの扱いに戸惑う生徒や現実の現象との関係性が納得できていない学生もいた。その点が，課題であろうと思われた。

・教育学部国語教育講座・河内昭浩先生の授業を参観した。生徒に対して，集中力を求めながら，適切に導いている様子に感銘を受けた。「題目」を本文理解のためのキーワードと捉え，文中から当該語もしくは類似語をピックアップしていく手法は一方途として有効であろうと感じた。この手法は本文の要旨をいち早く摑むことに関しては非常に注目されるが，一方で読みを深めていく行為にどのように活かされていくのか，今後の展開が楽しみである。

・題名の言葉の正確な理解を通じて，テクスト全体を素早く大づかみにするという授業内容だったが，言語を教える教員として興味深く，学ぶところが多かった。「大づかみ」にするためには，しばしば題名に現れるような重要な語彙の正確な理解が必要であることを，改めて確認することができた。屈折語尾など語の形態の正確な認識が，文意味の理解に不可欠であり，単文の理解というミクロ的な見地にもいても，着目すべき点が学習者に明らかになるように指導することの重要性が認識できた。

(3) 成果，次年度に向けて

参観者の感想から，どの授業も児童・生徒だけでなく，参観者自身にとっても大変参考になったことが分かる。特に「実感を伴った理解」を促す授業として，授業者が提案をすることで，現在の教育的ニーズに応えうるものになると考える。さらによりよい研究をしていくためにも，授業だけでなく研究会等の設定を行い，授業について協議していくことも大切になってくる。

5.　附属学校園と大学教員の連携による附属学校園教員研修会

FD センター運営委員　　関　　貴充
FD センター運営委員　　豊岡　大画

(1) 事業概要

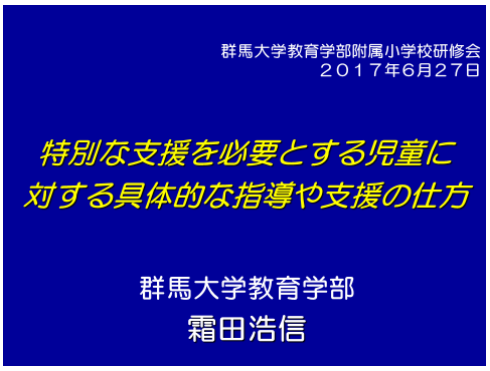
講師に群馬大学の霜田浩信教授をお招きし，特別な支援を必要とする児童に対する具体的な指導や支援の仕方についての研修会を 6 月 27 日に附属小学校で行った。研修会には，附属小学校教員や附属幼稚園教員が参加した。

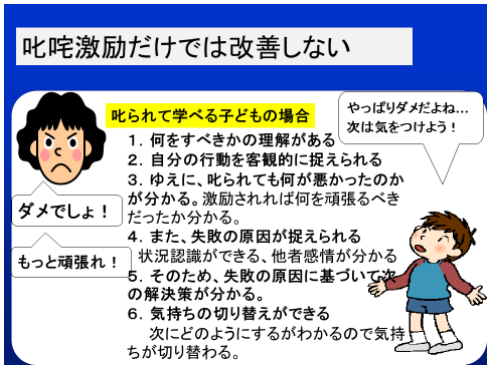
(2) 報告

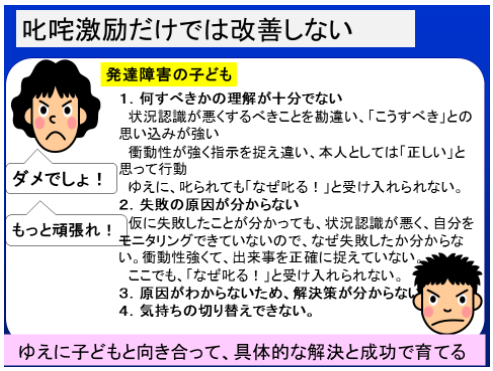
「視覚認知に頼らない支援についての講義」

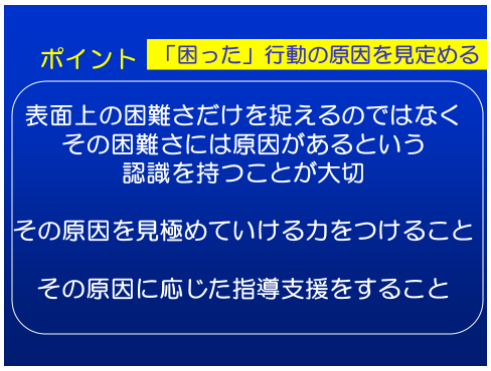
「研修会全体の様子」

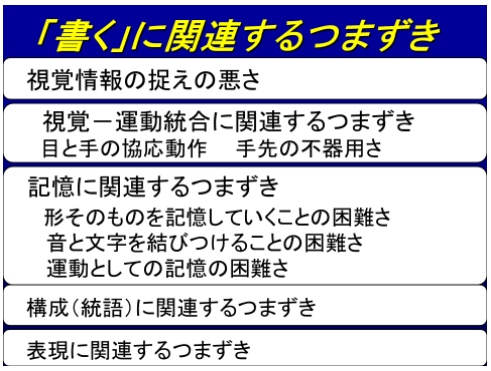
研修会では，特別な支援を必要とする児童について，「学習面」「生活面」それぞれのつまずきや原因と，それに対する支援を教えていただいた。

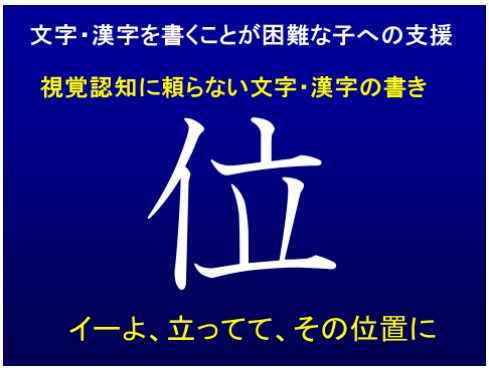


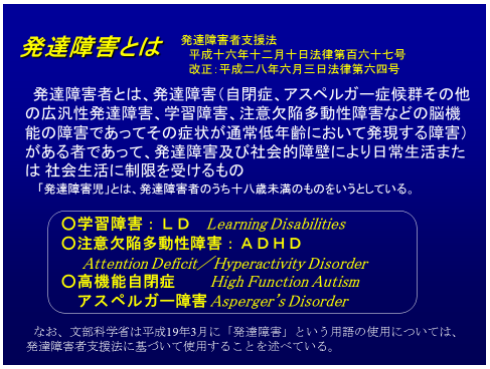


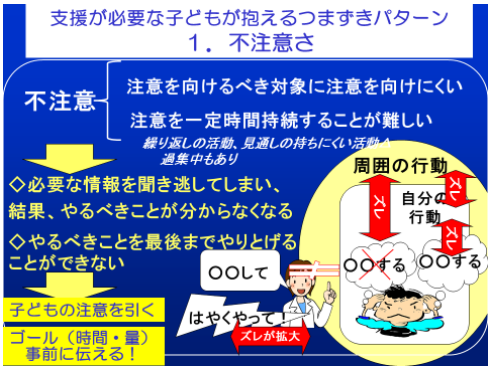


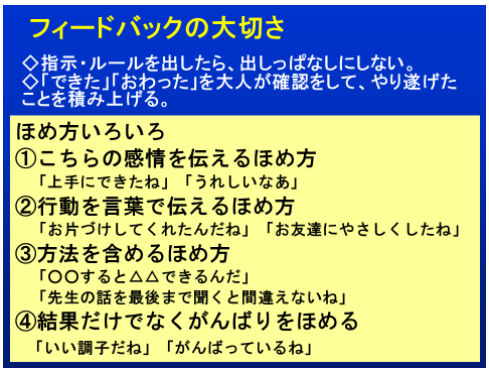












＜研修会配付資料 2017. 6. 27＞

(3) 成果，次年度に向けて

児童一人ひとりのつまずきをどのようにしてみとればよいのか，また，つまずきを取り除いていくための段階的な支援や指導を教えていただき，大変参考になった。特に，小学校１年生にとっては，特別な支援を必要とする児童以外にも有効であると感じた。児童によって実態が様々であると同様に，我々教師も，児童のニーズに合った指導をしていくことで児童が安心して学校生活を送ることにつながる。来年度も同様に研修会を行っていき，教師が共通理解の基，指導を行えるようにしていきたい。

6.　新任教員 FD 研修会

FD センター運営委員　　日置　英彰
FD センター運営委員　　本村　猛能

(1) 事業概要と報告

① 第 1 回

期日：2017 年 6 月 29 日（木）
時間：16 時 20 分～
場所：教育学部 B102 教室
内容：1. 本年度の新任教員 FD 研修の概要（吉田）
2. 平成 29 年度　FD センター運営委員の紹介，新任教員の紹介
3. 教育学部の歴史，組織，特色（学部長）
4. 附属学校の役割（今井）
5. 教員養成の仕組み（黒羽）
6. 意見交換
7. その他
次回（第 2 回研修会）について

本センターで行う FD 研修の概要，本学教育学部の特色，附属学校園に関すること，教育実習の内容等について説明がなされた。例年より遅い開催となってしまったが，新任教員が教員養成システムの現状とその課題，群馬大学の教員養成の特色等を理解した上で，教育や研究をスタートできるよう，効果的なサポートができたと考えている．

② 第 2 回

期日：2017 年 7 月 13 日（木）
時間：16 時 20 分～
場所：教育学部 B102 教室
内容：1. 附属小学校公開研究会　授業紹介・解説等（豊岡，関）
2. 6 月の附属学校園公開研究会に参加して（楠元，大谷）
感想，質問，気づき等
3. 意見交換
4. その他
今後の事業計画と次回（第 3 回研修会）について

最初に本センターの豊岡，関，両専任運営委員より附属小学校公開研究会で行われた授業の解説が行われた。附属学校で行われている研究テーマを深く知ることができ，その成果や

課題について活発な議論が行われたことから，新任教員だけでなく，本研修会参加者にとって大変有意義な研修会となった。

③　第 3 回

期日：2017 年 12 月 21 日（木）

時間：16 時 20 分～17 時 50 分

場所：教育学部 B102 教室

内容：1.　教育実習の振り返り　（吉田）

2.　研究者教員が学校現場で授業をするためのポイント　（河内）

3.　FD 対象事業への参加から

・教育実習（A，C）について

・附属中学校公開研究会，附属特別支援学校研究会

・附属小学校・自主公開研究会

・附属学校園での大学教員による授業

4.　その他

・今後の事業計画の確認

・次回（第 4 回研修会）について

教育実習の振り返りでは，新任教員から教育実習を手厚く実施している様子が実感できたとの感想が多くよせられた。続いて国語教育講座の河内昭浩准教授による講演が行われた。研究者が授業を行う留意点や，公開研究会等で求められる指導助言に関することなど，大変示唆に富む内容であった。今回本研修会に参加できなかった多くの学部教員にも是非聞いてもらいたいとの意見が多くあがった。

河内先生の講演の様子

④　第 4 回

期日：2018 年 2 月 20 日（火）

時間：12 時 50 分～14 時 20 分

場所：教育学部 B102 教室

内容：1.　新任教員による報告（発表）　　（楠元）

2.　新任教員による報告（発表）　　（大谷）

3.　1 年間を振り返って

4.　その他

・報告書原稿について

2 名の新任教員の 1 年間の活動報告が主な内容だった。両新任教員ともに附属四校園で行われた公開研究会や教育実習の機会に非常に多くの授業を参観していた。この活動をとおして，学生にどのような教育をすべきか，また学校現場が抱える課題に対して自身の専門性を活かした研究課題についても考える機会になったとの発表であった。この FD 研修が大変有意義なものであったと感じている。

新任教員の
発表の様子

Ⅲ．活動報告

1.　FD センター運営委員会の会議報告

(1) 第 1 回会議

期日：2017 年 5 月 11 日（木）

時間：16 時～17 時

場所：学校教育臨床総合センターA111 室

内容：1. はじめに

2. FD センターに関する規定等

3. 2017 年度委員

4. 活動計画

5. その他

(2) 第 2 回会議

期日：2017 年 6 月 1 日（木）

時間：16 時 30 分～

場所：臨床総合センターA111 室

内容：1. 2017 年度　FD センター運営委員会の構成と役割分担

2. FD センターの目的及び業務と国立大学法人群馬大学中期計画（第三期）

3. 2017 年度事業計画（案）

4. 新任教員 FD 研修計画

5. その他

(3) 第 3 回会議

期日：2017 年 6 月 29 日（木）

時間：17 時 50 分～（第 1 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：教育学部 B102 教室

内容：第 2 回新任教員 FD 研修会内容の確認

期日：2017 年 7 月 13 日（木）

時間：16 時 20 分～17 時 50 分

場所：教育学部 B102

1.　附属小学校公開研究会　授業紹介・解説等（豊岡，関）

2.　6 月の附属学校園公開研究会に参加して（楠元，大谷）

3.　意見交換

※終了後，FD センター運営委員会

(4) 第 4 回会議

期日：2017 年 7 月 13 日（木）

時間：17 時 50 分～（第 2 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：教育学部 B102 教室

内容：1. 今後の FD センター事業計画

2. 第 3 回新任教員 FD 研修会内容の確認

期日：2017 年 11 月以降（教育実習等終了後以降として期日は未定）

内容：教育実習 A，附属中学校公開研究会，FD 参加からの学び等

※終了後，FD センター運営委員会

(5) 第 5 回会議

期日：2018 年 2 月 20 日（火）

時間：14 時 20 分～（第 4 回新任教員 FD 研修会終了後）

場所：教育学部 B102

内容：1. FD センター報告書の作成（資料配付，分担・スケジュール確認等）

2. 2018 年度　FD センター運営委員会事業（計画案，委員構成等）

3. 第 6 回　FD センター運営委員会予定（持ち回り）

報告書点検，次年度計画案点検等

(6) 第 6 回会議

期日：2018 年 3 月 19～23 日（持ち回り）

内容：1. FD センター報告書の点検・承認

2. 2018 年度　FD センター運営委員会事業計画（案）の点検

3. 2018 年度　第 1 回　FD センター運営委員会の開催日程

2.　新任教員の報告：学び続ける教師を目指して

理科教育講座　　大谷　龍二

1. FD 委員会関連事業に参加して

(1)　附属授業研究会

①　附属中２年１組　理科「二酸化炭素中でのマグネシウムの燃焼」　６月１日(木)

②　附属小４年２組　理科「空気や水を使った鉄ぽうの秘密を調べよう」　６月 18 日(土)

③　附属特支　シンポジウム「インクルーシブ教育システム構築の実践－私たちの取組と，これから－」　６月 30 日(金)

④　附属中２年１組　理科「生命を維持するはたらき」　９月７日(木)

⑤　附属中３年３組　理科「水溶液とイオン」　９月７日(木)

いずれの授業も子供たちは，主体的に生き生きと学習に取り組んでおり，活気のある授業であった。生徒にじっくりと思考させる場面を設定し，よく話し合いも行われていた。いろいろなことに挑戦する授業が多かった。結論と正対した課題を設定することや子どもの発達段階に応じた言葉で本質を分かり易く伝えることの大切さを感じるとともに，「授業づくりは問いづくりである」ことを実感した。シンポジウムでは，現場で行われているインクルーシブ教育を具体的に知ることができた。

(2)　教育実習

①　教育実習Ａ　附属中３年２組　理科「酸・アルカリとイオン」　10 月３日(火)

②　教育実習Ｂ　多々良中１年４組　理科「水溶液の性質」　11 月２日(水)

附属学校での教育実習では，主に教科指導の面での実習が多く，どのような授業を展開すべきかを多く学んだようである。また，協力校における教育実習では，教科指導以外にも多くの職務を経験し教師の仕事について多くのことを学ぶ機会であったように感じる。

(3)　大学教員による附属学校での公開授業

①　附属小５年３組　国語科「読書感想文を書こう」　河内昭浩准教授　７月 18 日(火)

～「何をどう書けばいいか，まったくわかりません。」という人のために～という子　ども目線からの導入で子どもたちの興味を引いた。読書感想文についての書き方の説明が丁寧であった。手順を踏んでおり，分かり易く，何をどうすればよいのかが明確に示され，子どもたちが取り組み易くなるように工夫されていた。指示が明確かつ的確であれば，子どもたちはすぐ行動に移せるということを感じた。考える場面，考えを表現する場面，考えを発表する場面，みんなで共有する場面等が設定されており，落ち着いた雰囲気の中で深い学びのある授業が展開されていた。

② 附属中１年４組　理科「動物の仲間（体温）」　佐藤綾講師　10 月 24 日(火)

佐藤先生は，動物の体温をサーモカメラで撮影し，教材化されていた。鳥類，は虫類，両生類，魚類をそれぞれ２種類ずつ撮影した。画面に気温と体温を表示させ，大変分かりやすい画面となっていた。生徒は，ｉＰａｄで画像を見ながら，表またはグラフで記録を作成し，体温と気温の関係から恒温動物と変温動物の違いをよく理解していた。生物関係の観察は季節や天候に左右され何かと制限されがちだが，画像に保存しておけばその欠点を補えることが分かった。画像も鮮明で，動物の体温と気温が簡単に把握できる点が特によかった。本教材は，実感を伴った理解を促すよい教材と考える。

③ 附属中１年４組　理科「音の性質」　青木悠樹講師　1 月 15 日(月)

青木先生は，音の伝わり方についてタブレット端末を使用し，その様子を分かり易く直感的にとらえさせる教材を開発された。音の大きさと高さの違いが，振幅と振動数の違いによることなどをよく理解することができる教材であった。オシロスコープの原理にも触れていたが，音の伝わり方をイメージするには大変良い教材である。多くの生徒は音の伝わり方を理解したようである。理解を深めるためのイメージ作りには，今回のようなＩＴを使った教材は大変効果的であることを学んだ。本教材は，ＩＴを活用した先駆的な完成度の高い教材であると考える。

(4)　大学教員による公開授業

① ベストティーチャー賞公開模擬授業　7 月 18 日(火)

岩瀧先生（教育学部推薦）は，バイタリティーあふれる授業を展開されていた。学生とともに講義を作り上げていくというスタンスが伝わってきた。牧野先生（医学部保健学科推薦）は，国家試験を意識された授業をされた。ご自分の経験を生かしながら，学生に力を付けさせるために日々努力されていることが伝わってきた。天野先生（理工学部推薦）は，「大学は自由で楽しいところ，分からなかったことが分かるのは嬉しい」をコンセプトに学生の指導に当たっているとのことである。独特なスタイルで離散数学Ⅱの授業を楽しそうに進めておられたのが印象的だった。

② ベストティーチャーの授業公開「心理学研究法演習」佐藤浩一教授　10 月 16 日(月)

学生が本当に熱心に取り組んでいた姿に感心した。学生はきちんと授業の準備をしてきており，学生の主体的な運営で演習が進んでいた。佐藤先生のご指摘は大変的確で，学生はどんどん力をつけていくことと確信した。学生にとって，主体的・対話的で深い学びができていると考える。

(5)　新任教員ＦＤ研修会

第１回　6 月 29 日（木）16:20～

斎藤学部長から教育学部・教育学研究科の現状と課題を丁寧にご説明いただいた。教育学部と県教育委員会との連携による「群馬の教員を育てる！」事業，そのための 4 年

間を見通したカリキュラム，手厚い教育実習システムや今後の教職大学院の方向性等教育学部の置かれた立場，今後の方向性や特色がよく理解できた。附属小の今井副校長から附属小の学校経営についてご説明いただいた。附属小の学校経営には，児童に対する教育，研究校としての使命，教育実習校としての教員養成といった 3 つの柱があるということであった。今井副校長の附属小に対する熱い思いを知ることができた。黒羽先生から教育実習の全体像を通して，本学部の教員養成の仕組みをご説明いただいた。今回の研修は，教育学部のことを知る大変良い機会になった。

第 2 回　7 月 13 日（木）16:20～

附属小学校の関先生から生活科，豊岡先生から図画工作科について，それぞれの先生から公開研究会の授業紹介，解説等の研究説明があった。公開研究会の時と違って，じっくり説明を聞くことができ，また参加者との意見交換により協議の内容が深まった。トップランナーとしての使命を自覚して，附属小の先生方が日々研鑽を積まれていることが，お二人の先生の様子からうかがい知ることができた。今回の研修は，附属小の取組の一端を知る良い機会になった。

第 3 回　12 月 21 日（木）16:20～

吉田先生から教育実習についての話をうかがった。振り返ってということであったが，本学部の教育実習の概要を知り，全体の流れを把握できた。教育実習を手厚く実施している様子が理解できた。また，種々のアンケート調査の結果は，興味深く参考になった。河内先生から，附属学校等での取組について話をうかがった。研究者教員が学校現場で授業をするためのポイントと題し，1 授業を見る，2 指導助言で求められる内容，3 授業をする，4 授業をする意義・心がけていることなどの内容であった。現場の教員が授業をする観点ではなく，研究者が授業をする上での留意点など研究者から見た視点での話であり，示唆に富んでいた。日々研鑽を積まれていることが河内先生のお話からうかがい知ることができた。今回の研修も，参考になることが多かった。実務家教員である自分にとっては，新しい視点を示していただいた。

第 4 回　2 月 20 日（火）12:50～

新任教員による活動報告を口頭発表で行った。その後，1 年間を振り返り意見交換を行った。

2. 1 年を振り返って

昨年 3 月末で県立高等学校を定年退職し，4 月から実務家教員として理科教育講座に赴任した。初めは戸惑いを覚えたが，周囲の先生方の暖かいご支援と多大なるご協力を賜り，何とか無事 1 年を乗り越えようとしている。以下に今年度の活動を振り返る。

(1)　学生の資質向上に関して

①　院生を対象とした授業「理科内容の課題と実践」

・後期に実施，理科関連 15 回，院生１名（現職教員）

・目的は理科教育の教科専門性及び指導力の向上並びに教育現場における諸課題の解決に向けた実践的指導力の向上

ア　物化生地の各領域にとらわれない小中高の理科を俯瞰した指導力について

イ　課題研究の指導について

②　「小・中学校理科の授業でよくみる観察・実験勉強会」

・理科専攻の学生（学部生）を対象に実施　　採用試験に役立たせる

・全 8 回 90 分で 4 月～7 月に実施，参加者（申込者数）：10 名

・小中学校教科書掲載の実験を丁寧に実施，主体的・協働的な活動を重視

・理科の学生についても，実験操作・実験器具の扱い等の細かい指導の必要性を感じた。

③　「小学校理科観察・実験克服勉強会」

・全 6 回 90 分で 10 月～1 月に実施，教科書の観察・実験内容　OP：1/26 月面観察会

・理科専攻以外学生（学部・院生両方）で教員採用が決定した学生を対象に実施

・自由参加の勉強会形式で実施，参加者（申込者数）：5 名

・小学校の教科書の内容を丁寧に実施し，主体的・協働的な活動を重視

・参加者は大変まじめに取り組んだ。学生から教師になるまでの準備期間として有効

④　教職実践演習の手伝い「実験力を鍛える」（2 回）

・教採の実技試験対策，ロールプレイ演習

⑤　大学院生による高校の授業を活用した実践的研究の支援，実践授業へのアドバイス等

・吉井高等学校（3 日間全 6 時間）

⑥　その他

・面接対策，学生との交流による情報収集

(2)　県教育委員会と群馬大学との連携事業に関して

①　県総合教育センター及び前橋市教育プラザの長期研修員による修士課程授業の聴講支援

・長期研修員からは前向きな感想が多く，好評であった。長期研修員も今の学生を見て参考になるようである。大学側も教育現場の実態を知る機会になっている。

②　科学の甲子園への積極的支援

・高校生の科学への興味関心をより一層高めるため，この催しをさらに充実発展させたい。県予選会の企画等を今後の検討課題としたい。

3. 今後の活動について

(1) 院生を対象とした授業「理科内容の課題と実践」について

目的は，理科教育の教科専門性及び指導力の向上と教育現場における諸課題の解決に向けた実践的指導力の向上を目指すことである。今年の経験を生かし，さらに充実した内容としたい。

(2) 学生への積極的支援に関して

① 勉強会の充実について

理科講座の学生を対象とした勉強会「小・中学校理科の授業でよくみる観察・実験勉強会」（前期），理科講座以外の学生を対象とした勉強会「小学校理科観察・実験克服勉強会」（後期），共に参加者の評判は良かったので，今年の経験を生かしそれぞれの目的に沿った充実した内容としたい。

② 教採に向けての面接指導等，積極的に学生を支援したい。

(3) 研究・自己研鑽に関して

① 小・中・高における学びの連続性や学習内容の関連性を意識した教材の研究

小・中・高の理科を俯瞰できる指導力の向上を目指す。

② 高等学校における探究活動の評価に関する研究

現在そして今後を見据えた課題研究等の指導や評価の在り方を模索する。

④ 研修の充実

附属小中学校，教育実習生等の研究授業参観及び授業研究会への参加による現場の実態把握，群馬大学の先生方との交流による自身の教員資質の向上・各先生（ＦＤでの公開授業含む）の授業聴講，各種研修会の参加，国立大学及び教員養成系大学を取り巻く状況の理解に努め，自分にできることを模索しながら行動に移す。

理論と実践の往還を意識し，学生に対してよりよいアドバイスができるようＦＤ研修で学んだことを今後に生かしながら，自分自身探究心を持ち続け学び続ける教師でありたいと考える。1 年間ありがとうございました。

3.　新任教員の報告：新任研修を終えて

技術教育講座　　楠元　一臣

(1) はじめに

私は，平成 29 年 4 月 1 日付けで群馬大学大学院理工学府から技術教育講座に異動し，田辺教授の後任として機械科目と金属加工科目を担当している。工学部機械システム工学科に平成 4 年 2 月に着任して以来，太田キャンパス生産システム工学科での勤務を含めて，群馬大学の教員としては 25 年の勤務となる。私の専門は金属加工分野であり，特に切断，溶接，表面加工に関する研究に従事している。

今年度の新任研修の一環として，FD 研修会 4 回，附属学校公開授業 4 回，教育実習 1 回，群馬大学と群馬県教育委員会によるシンポジウム 1 回に参加し，教育学部での教育や研究の特色と今後の心構えや進め方について学ぶことができた。以下は参加した公開授業等の概要と感想である。

(2) 公開授業および教育実習の報告

①　公開授業 1 「地層のでき方を解明しよう」

（平成 29 年 6 月 9 日(金)・10 日(土)　群馬大学附属小学校 6 年 3 組）

本授業は，「なぜ地層はしまもうようになるのだろうか」という地層のでき方を解明する授業である。これまでに学んだ事柄や生活経験に基づく意見を出し合い，正解に向かうものであったと思う。しかし，正解は容易に見出せるものではなく，生徒たちも苦労している様子であった。

本授業を参観して，問題自体が難しい部類に属するためか，問題解明の手法に力点が注がれているようで，自然のすばらしさや不思議さを感じ得る内容があればと思った。本授業のように小グループに分かれて議論し予想や仮説を展開していく方法は，授業の質的向上を図る上で大いに参考になった。

②　公開授業 2 「学校の周りを花できれいにしよう」

（平成 29 年 6 月 30 日(金)　群馬大学附属特別支援学校）

本授業は，注文の寄せ植えを教室でつくり，近所の歯科医院に届けるという作業学習である。どの生徒も熱心に励んでいた。特に寄せ植えが倒れず，花屋の商品のように見事に収まって出来上がったのには感動した。後の学部別授業研究会で担当教諭から花が上手に収まることができる教具の準備に苦労したとの報告があった。

本授業の素晴らしさは，生徒に達成感や喜びを持たせるために，教師が授業時間外に教具の準備に努力した点である。教育現場では教具の効果的な活用が重要であることを改めて認識させられた。今回の授業を参考にして，教具を活用した授業を取り入れて，学生の理解を少しでも手助けできる工夫を行っていきたい。

③　公開授業 3 「強くしなやかに創造する力の育成」

（平成 29 年 9 月 8 日(金)　群馬大学附属中学校 1 年 1 組　技術・家庭科「材料と加工」）

本授業は，「フォトフレーム付き卓上カレンダーを製作しよう」の第３時の「見本作品を観察して気付いたことを生かして，設定した課題や構想の修正方法を考えよう」である。本授業の主題は，「課題を解決するためのよりよい方法を判断し，生活を工夫し創造できる生徒の育成」であり，具体的には先輩の作成した作品を鑑賞して気付いたことを話し合い，設定した課題や構造に修正を加える内容であった。安全性・材料の有効利用・作業効率などに着目して製作品の構造や形状の最適化を行うということだが，中学１年生に対しては高度で難しい要求項目であるように思えてならなかった。生徒の主体性や感性を活かした物づくりの楽しみや喜びが感じられるような授業ができないものかと思った。

本授業を参観して，既成物を掲示し観察することによって重要な事柄を抽出していく手法は，授業の質的向上を図る上で大いに参考になった。

④　公開授業４　「幼児の遊びを豊かにする園庭」

（平成 29 年 10 月 28 日（土）　群馬大学附属幼稚園　保育４歳児）

本授業は，「好きな遊びをのびのびとするようになる」「思い切り身体を動かして遊ぶようになる」をねらいに掲げて行われた。保育参観および研究会を通じて，以下の事柄を知ることができた。

第一点は，園児が園庭で遊ぶ時には，先生は幼児に背を向けずに幼児が絶えず見えるような姿勢をとるようにする。第二点は，指導に際し先生がつきっきりでなく，園児たちで解決できるように先生が行動して見せて，その後に園児に真似させる時には，途中で抜けるなどの工夫がポイントである。今回，最も印象的であったことは，幼児に指示する場合に必要な行動を直接的な言葉（たとえば，片付けよう）ではなく，結果的にどういう状態（きれにしよう）にしたいのかを言うように心がける指導である。今後の学生指導に大いに参考になった。

⑤　教育実習　「エネルギー変換に関する技術」

（平成 29 年９月 28 日（木）　伊勢崎市第三中学校　２年６組）

本授業は，リンク教材を使って簡単な機械の機構（伝達の仕組み）を説明し理解させる内容である。教室に実物の自転車を配置し，実際に生徒にこがせる手法およびエンジンのスライダークランク機構の理解にダンボール模型を用いた手法は，生徒への興味や理解を深めるユニークなものであった。生徒の理解には，対象生徒の成長に合わせた親しみ易さや受け入れ易さを考慮した手法が最良であると感じた。

私自身は技術専攻２年生を対象とした機械学の授業のなかで，ダンボールを積極的に利用した教具の製作を実践しているところであり，今回の研究会を通じてさらなる工夫を重ねて教具の開発を行いたい。

(3) まとめ

新任研修会に参加して，教育学部の目ざす教育と研究について知ることができた。また，学生が卒業後に働く幼稚園，小学校，中学校，特別支援学校での公開授業および研究会に参加し，学校現場の現状をより良く知ることができた。得られた貴重な経験を生かして，今後の教育および研究活動に役立てたいと思う。

4.　FD 発表の報告：附属学校をはじめとした小中学校での授業実践のポイント

国語教育講座　　河内　昭浩

1. はじめに

このたび，このような発表，報告の機会をいただきましたことに大変恐縮しております。題名の通り，私は附属小中学校をはじめ，さまざまな学校で授業をさせていただいております。元々は，自分自身が一実践者でありたいという単純で，個人的な動機によるものです。ただ近年は授業をさせていただく機会が国内外に増え，大学教員として児童生徒の前に立つ意義や方法を確立しなくてはならないと感じていたところでした。本報告は意義や方法の確立には遠く及びませんが，これまでの実践を振り返り，自分自身の今後の実践の糧とするとともに，少しでも皆様の参考になるところがあれば幸甚と思う次第です。

2. 授業の申請・形態と内容

(1) 授業の申請・形態

附属学校で授業をさせていただく場合，まずは当該教科担当の先生方に打診をします。時期と内容を相談し，当該教科担当の先生方を通じて学年団，教務，管理職の先生方の了承を得て，授業をさせていただくことになります。

附属学校以外での授業は，すべて学校側からの依頼を受けてのものです。

授業の形態は，同学年のすべての児童生徒を対象に一斉に大教室で行う場合と，個別のクラスで行う場合とがあります。私の場合，この形態でお願いしたいという話をこちらからさせていただくことはありません。児童生徒の実態や，授業日設定の時期，例えば行事が立て込んでいるなど，に応じて学校側に決めていただいてもらっています。

(2) 授業の内容

①　大学教員としての専門性を生かした授業

私は研究の一環で，日本語のコーパスという言語のデータベースの構築に携わっています。そのコーパスを活用した，国語科の語彙や古典の授業を行うことがあります。こうした授業は，自分自身の研究に直接的にフィードバックさせることができるものです。

また新しい学習指導要領で，国語科の語彙や古典の指導の改善・充実が求められています。語彙や古典の授業の新しい形を提示することで，授業を参観してくださる現場の先生方の研修にもなっているかと思います。

②　苦手意識の強い分野の授業・一話完結の授業

国語科では多くの先生方が作文の指導に苦手意識を持っています。特に行事後の作文や読書感想文などは，指導の時間自体が確保されない場合も少なくありません。そうした作文の指導を行うことがあります。また別に，指導が行われにくいものとして，辞書の使い方の授業を行うこともあります。

こうした授業も，参観してくださる現場の先生方にとって研修の場となっているかと思います。また同時にこれら作文や辞書の授業は，一単位時間のみでの構成をしやすいものです。「一話完結」の授業を作りやすい分野を内容に選定するということも，こうしたいわゆる「飛び込み授業」においては重要なことかと思います。

3. 授業をする意義・心がけていることなど

(1) 双方向的授業改善

前節で触れましたが，私が小中学校で授業をする際，当該校の国語科の先生方やクラス，学年団の先生方が参観してくださいます。最近では全校を挙げて参観してくださり，それが当該校の研修プログラムに位置づけられているといった場合も少なくありません。

一方で，私は授業の際，なるべく多くの学生や院生を連れて行きます。そして学生や院生に，プリントの配布やテキストの音読，机間指導など，補助者として授業に参加してもらっています。教育実習以外の現場体験として，学生や院生にとって大切な学びの場となっていると感じています。繰り返し参加している学生や院生を見ていると，少しずつ個への対応ができるようになっていたり，明朗な発音発声で声かけや音読ができるようになっていたりするのが分かります。また別に，授業のために私が作成した学習指導案や授業の録画を，大学の教科指導法の授業で活用しています。

授業をさせていただく学校の児童生徒，先生方に対してはもちろんですが，大学に所属する学生院生，何より私自身にとって，学びが深まる場となっていると思います。

(2) 大学と小中学校の新たな関係の構築

「理論と実践」という言葉がよく用いられます。多くの場合，大学の研究者が理論を授け，小中学校の教師がその理論を基に実践するといった形で展開されてきたと思います。

しかし私自身は元々学校現場の人間です。そしてまた大学も学校現場，教育現場です。小・中学校同様に，生きる力，資質・能力を育成し，そのための授業の改善を行うことが求められています。また一方，小中学校では，学び続ける教師であることが強く求められています。

そのように考えると，これまでとは異なる，新しい「理論と実践」の形が必要なのではないかと考えています。大学教員も，小中学校教員も，主とする部分は異なるにしても，互いに理論と実践の両面を受け持ち，互いに理論と実践の両面を高め合うような，そのような関係を構築していきたいと考えています。

いま，附属中学校国語科の先生方と，「学習用語を活用した説明的文章の系統化」という大きな研究テーマに取り組み始めました。これまでの一話完結の授業とは異なり，３年間を通じて，理論と実践の両面で今後関わっていくことになります。

(3) 人間関係があってこそ

以上述べさせていただいてきたことはすべて，先生方との良好な人間関係があってこそであることは言うまでもありません。受け入れてくださった附属学校の先生方をはじめとした多くの先生方に心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

5.　運営委員の報告：新任教員 FD 研修会発表内容から
－ 附属小学校における生活科の研究報告 －

FD センター運営委員　　関　　貴充

(1) 第 2 回新任教員 FD 研修会

①　研究について

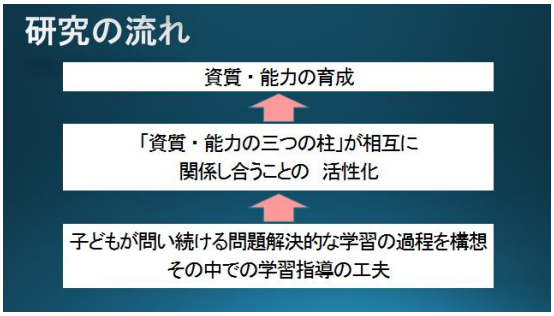
生活科では,「未来を拓く子ども」の育成のために,「思いや願いの実現に向けて，対象に関わり続ける資質・能力」を育むことが必要である。なぜなら，この資質・能力が育まれることで，子どもたちは生活上出合う様々な対象に対して，対象と自分自身との関わりをよくしようとする思いや願いをもち，その実現に向けて対象とのよりよい関わり方を粘り強く求め続けながら，繰り返し対象と関わっていくことができるようになると考えたからである。そして，これは，本校の子どもたちの課題である「問題に対するよりよい答えを粘り強く追求し続けていく」ことの改善につながり，生活科の学習を通して,「未来を拓く子ども」を育成できると考えたからである。そこで,「思いや願いの実現に向けて，対象に関わり続ける資質・能力」についての三つの柱である,「学びに向かう力・人間性」,「知識・技能」,「思考力・判断力・表現力」を，それぞれ「思いや願いの実現に向けて，対象に関わろうとする態度」,「対象や自分自身への気付き」,「対象と自分自身との関わりを捉える力・対象との関わり方を見出す力」と捉えた。

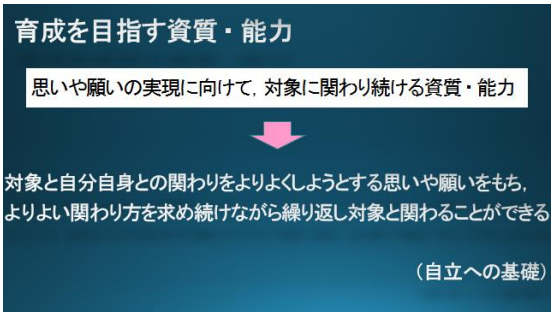
生活科の学習において,「対象と自分自身との関わりを捉える力，対象との関わり方を見出す力」が働くことによって，気付きが自覚されたり，関連付けられたりして「対象や自分自身への気付き」の質が高まる。また,「対象や自分自身への気付き」が活用されることで,「対象と自分自身との関わりを捉える力，対象との関わり方を見出す力」がよりよく働くようになる。そして，これらが相互に関係し合いながら向上する中で,「思いや願いの実現に向けて，対象と関わろうとする態度」が高まる。このように，三つの柱が関係し合うことが，生活科の学習の中で活性化されることにより,「思いや願いの実現に向けて，対象と関わり続ける資質・能力」が育まれる。

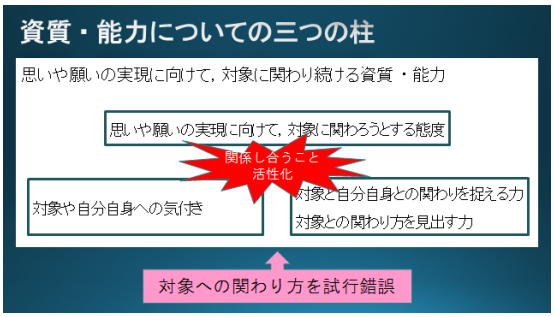
これまでの本校生活科の学習において，子どもたち一人一人が，思いや願いの実現に向けた対象への関わり方を試行錯誤する際に，三つの柱が関係し合うことが活性化され，繰り返し対象に関わっていくことができる子どもが見られ始めた。このことから子どもたち一人一人が，生活科の問題解決的な学習の中で，思いや願いの実現に向けた対象との関わり方を問い続けていくことが，本校生活科で育成を目指す資質・能力を育むために大切であると考えた。そこで，本校生活科の単元における問題解決において，子どもたち一人一人が，思いや願いの実現に向けた対象との関わり方を問い続けることができるように，問題解決的な学習の過程を構想し,「対象との関わり方を友達と伝え合う活動の設定」,「新たな関わり方を記述する箇所を設けた学習プリントの用意」を，学習指導の工夫として行った。

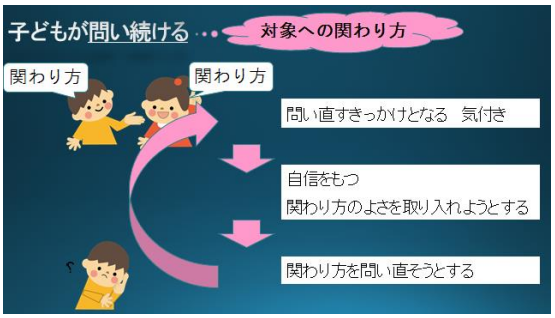
「対象との関わり方を友達と伝え合う活動の設定」については，子どもたち一人一人が，「対象と自分自身との関わりを振り返る」際に，思いや願いの実現に向けた対象との関わり方を問い続けることができるように設定し，「自分の関わり方のよさ」という視点を基に，会話や動作を取り入れながら，対象との関わり方を友達と伝え合えるようにした。その際，それぞれの子どもの関わり方に注目できるように，対象やモデルの数を制限したり，関わり方を伝える順番を決めて時間で区切ったりした。

「新たな関わり方を記述する箇所を設けた学習プリントの用意」については，子どもたち一人一人が，「対象と自分自身との関わりを振り返る」際に，思いや願いの実現に向けた対象との関わり方を問い続けることができるように工夫した。この学習プリントには，気付きを記述する箇所だけでなく，「次にやってみたい方法」として，対象との新たな関わり方を記述する箇所を設けた。「次にやってみたい方法」については，子どもたち一人一人が見通しをもって，活動に取り組めるように，次に「対象と関わる」際の導入時に見返すこととして活用した。









② 公開研究会での授業について

生活科の単元「おおきくなあれ」を公開した。育成を目指す資質・能力の三つの柱を「アサガオをさらに大きく育てたいという思いや願いの実現に向けて，アサガオを大切に世話しようとする態度（学びに向かう力・人間性等）」，「アサガオの成長や世話の仕方，アサガオの世話ができた自分自身への気付き（知識・技能）」，「アサガオと自分自身との関わりを捉える力・アサガオの世話の仕方を見出す力（思考力・判断力・表現力）」と捉え，相

互に関係し合うことを活性化させることができるように，「アサガオ聴診器を用いてアサガオの気持ちを考えたり，アサガオの間引き方や日常的な世話の仕方を友達と伝え合ったりする活動の設定」と，「アサガオ健康観察カードの用意」を研究上の工夫として行った。また，本時に問い続ける「対象との関わり方」を，アサガオの間引き方とした。ただし，子ども達は引っ越しの仕方と捉えていた。授業では，「アサガオをよく観察して引っ越しのやり方を考えていたり，友達のアサガオの気持ちの理由を伝えたりしている」姿として表れていた。

6.　運営委員の報告：新任教員 FD 研修会発表内容から
－ 附属小学校及び附属特別支援学校公開研における研究報告 －

FD センター運営委員　　豊岡　大画

(1) 附属小学校公開研における研究報告について

第２回新任教員 FD 研修会において，附属小学校公開研における図画工作科の研究報告を行った。公開研概要と共に図画工作科の研究発表及び公開授業の様子をプロジェクターで説明を行った。

公開研の概要として，附属小学校は，９月から研究がスタートし，提案・部内授業という研究を具現化した授業を公開し授業研究会を行う。３月に研究成果を紀要にまとめ，６月に２日間に渡り公開研究会で研究発表及び授業公開を行い，分科会を行うことを説明した。

図画工作科の研究報告として以下の内容の説明を行った。

本校図画工作科における題材・単位時間における問題解決において，子どもたち一人一人が，自分なりのよさや美しさについて試行錯誤し，問い続けることができるように，問題解決的な学習の過程を構想し，その中で学習指導の工夫を行うこととした。

学習指導の工夫として，試行錯誤を主体的に進めるための題材・単位時間における活動の見通しと振り返りを重視して題材構想を行った。

具体的な見通しをもたせるための手立てとして，題材・単位時間の活動の見通しをもつための試しの活動の設定　を行った。試しの活動には，子どもたちが，試行錯誤を進める上で必要となる知識や技能を得るものと，見方を広げるための造形的視点を得るものが考えられる。その際，試しの活動の設定では，題材の中で試しの活動を特設する場合と，題材の活動の中に特設せずに意図的に含み込ませる場合が考えられる。以上の観点について試しの活動の目的と，活動の設定の工夫の視点から整理した。

具体的な振り返りをさせるための手立てとして，試行錯誤の進め方を身に付けるための振り返りの活動の設定を行った。子どもたちが試行錯誤を進めるためには，子ども自身が学習活動の過程を振り返り，試行錯誤の進め方を身に付けることが必要である。その際，子どもの自然な思考に沿った振り返りを行うことできるよう，振り返りの内容と方法について整理した。

本年次の研究を進めてきた結果，次のような成果と課題が明らかになった。

成果として，試行錯誤を主体的に進めるための活動の見通しと振り返りを重視する指導方針を基に，活動の見通しをもつための試しの活動の設定と，試行錯誤の進め方を身に付けるための振り返りの活動の設定を合わせて行った。それにより，自分の思いを具現化しようと試行錯誤を繰り返したり，自分や友達のつくった作品を基に，話し合ったり一緒に

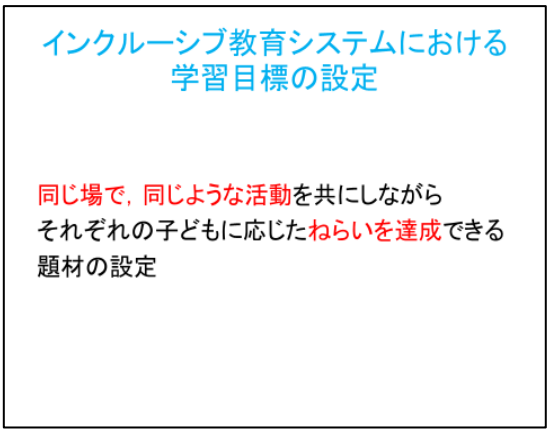
つくったりしながらイメージを更新して価値をつくり続ける姿が見られた。この姿は，自分なりのよさや美しさを問い続け，試行錯誤を主体的に進める姿であると捉えた。このことから，図画工作科を特徴付ける考え方や捉え方を働かせながら，主体的・対話的に学習を進め，三つの柱が相互に関係し合うことが活性化されたと考える。

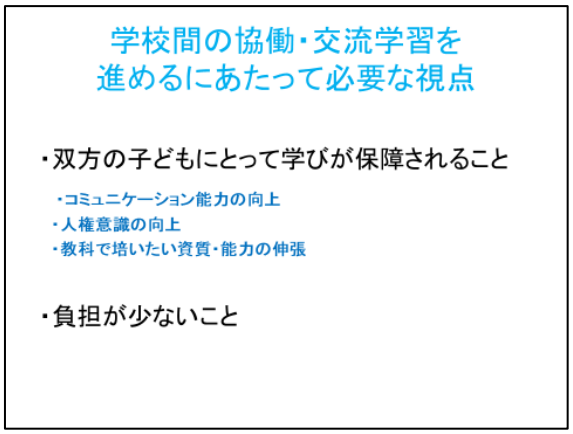
一方で，子どもが自らの活動の過程や自分なりに捉えたよさや美しさを改めて振り返り，価値付けしたことを自覚したり実感したりすることが難しい子どもの姿も見られた。これは，自らの思いや活動を客観的に振り返ることの難しさや，言語化の難しい感性を働かせることを重視する図画工作科の特徴に起因するものと考えられる。今後は，試行錯誤を主体的に進めている子どもの姿を形成的に評価することと，題材の終末に総括的に評価することを，子どもの自己評価と関連付けて評価する方法について研究を進めていく必要がある。

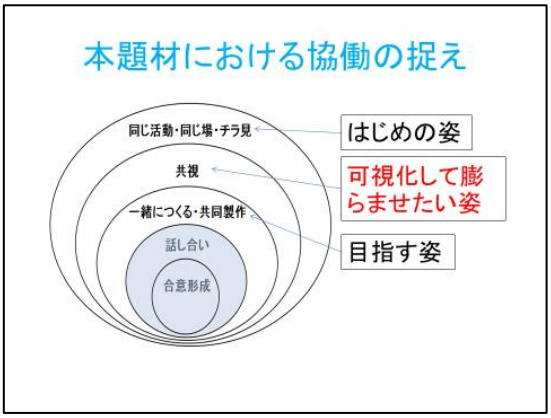
(2) 附属特別支援学校公開研における研究報告について

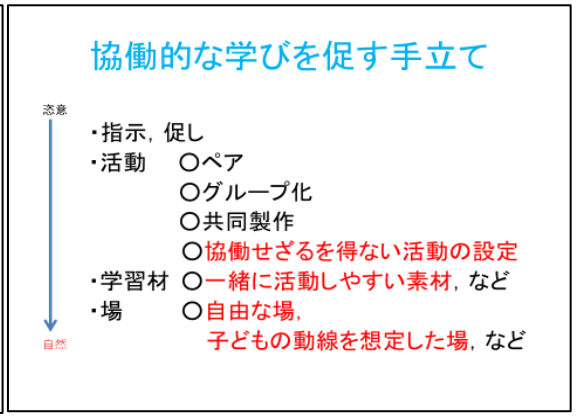
第２回新任 FD 教員研修会において，附属特別支援学校公開研におけるインクルーシブ教育システムの構築についての，図画工作科の実践報告及び研究報告を行った。

図画工作科における小学校と知的障害の学習指導要領の比較を行った。そして，学習目標の設定の観点や協働の捉えなどを説明し，インクルーシブ教育システムの構築についての研究の成果と課題について説明した。









成果としては，図画工作科は，インクルーシブ教育システムの理念に応じた題材開発を行い易い教科であること，Ａ表現（１）造形遊びは，個人差が生まれにくく行い易いこと，それぞれ子どもの実態をよく知る双方の教師がＴ１となること。事前打ち合わせは，実態・ねらい・評価・場の設定について焦点化して行い，授業運営は簡単に済ますことなどが明らかとなった。課題としては，図画工作科のＡ表現（２）意図的な表現は，個人差が表れやすいこと。Ｔ１が一人で題材設定するのは負担が大きいことが考えられる。

Ⅳ. FDを通して大学教員と附属学校園が連携することの意義
ー　編集後記に代えて　ー

教員養成FDセンター　副センター長　　今井　東

1.　「公教育のモデル」としての附属学校園の役割

附属学校園の大きな役割の一つは，公教育のモデルとして県下の学校に役立つ研究成果を示すことである。公教育のモデルたり得る研究や実践を公立学校の現場に示すことができるか，これが私たち附属学校園の課題である。このことは，昨年８月末にまとめられた「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」～国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書～でも指摘されている。

現在，本校（附属小）の本務教員の平均年齢は33歳であり，ここ10年で見ても最も若くなっている。これは他の3校園でも同じような状況である。

このような中，教員は先の課題解決に向け真摯に取り組んでいるが，各教科等の専門的なバックボーンが十分でない若手教員は，研究や授業づくりにおいて苦労している。

そのようなときに，大学教員に積極的に附属学校園に足を運んでいただき，公開研究会を始めとする研究や授業に対する助言をいただくこと，児童を相手にした示範授業を行っていただき共に授業研究会を行うこと等，積極的に教員との交流を図っていただくことは，附属学校園にとって，たいへん貴重な機会となる。附属学校園が，大学教員から専門的な立場で助言をいただいて研究や授業づくりを進められれば，これほど心強いことはないからである。

FD を通した大学教員と附属学校の連携は，公教育のモデルとしての附属学校の使命達成のために大きな意味をもっている。

2.　優れた教員を育成・輩出する「教育実習校」としての附属学校の役割

附属学校園のもう一つの大きな役割は，質の高い教育実習を行い，公教育に貢献できる優秀な教員を養成することである。そのためにはまず，附属学校園の教員の指導力を高めなければならない。

しかし，本校では，先ほど述べたような若手教員が多いため，ともすれば，指導案の作成の仕方などをあれもこれもすべて実習生に身につけさせようと躍起になり，実習生を消化不良の状況に追い込んでしまう懸念がある。

教育実習の指導はかくあるべきという指導のポイントや手順をしっかり教員が理解していて，要点を押さえた指導ができなければ，実習の効果は上がらない。

そこで，教育実習の効果を上げるための方策として考えられるのが，大学教員の積極的な授業参観である。大学教員が附属学校園での実習の様子を数多く参観し，その後，教育実習の指導のポイントについて附属学校園の教員と情報交換し合う。このことは，附属学校園の

教員にとって大きなメリットとなる。日頃，大学の教職課程で，大学教員が学生に指導している内容やその中での課題等について，直接話を聞く機会をもつことで，本当に学生に指導すべきポイントが明らかになるからである。

また，大学教員側のメリットも大きい。附属学校園での実習生の授業を数多く参観することで，大学での講義や演習がどの程度実習生に身についているのかを直に確認することができるからである。そして，そこで確認したことを以後の講義や実習に反映させることもできるからである。

このように，大学教員が教育実習の様子を数多く参観し，附属学校園の教員と情報交換し合うことは，双方にとって大きなメリットとなる。また，このことが，附属学校園の使命である教育実習の質の向上にもつながる。

3.　FD を通して大学教員と附属学校園が連携する意義

以上，1，2 で述べた附属学校園の役割を果たすための取組を FD を拠点に行えたなら，これこそが，FD を通して大学教員と附属学校園が連携する意義である。また，このことが，有識者会議の中で指摘された附属学校の課題解決にもつながるのである。

これらの取組は，実は，大学教員と附属学校園とが連携した「教員の資質向上」への取組に他ならない。附属学校園の教員の資質向上，そして，大学教員の資質向上はもちろん，次代を担う教員である教育実習生の資質向上への取組である。

また，結果としてこれらの取組が，大学と附属学校園の信頼性や存在意義を一層高めることにもつながるのである。

日常的な風景として，大学教員が FD を拠点に自由に附属学校園の中を歩き回る。そして，当たり前のように授業参観をしたり教職員と情報交換を行ったりする，そんな姿が見られることが私たちの理想である。その実現に向け，今後ともよりよい FD センターの在り方を学部と附属学校園とで共に考えていきたい。

現在，厳しい状況に置かれている大学や附属学校園を活性化する鍵となるのが FD センターの存在である。

終わりにあたり，これまでにも行われてきた学部・附属学校園の連携した活動にも新たな視点から整理を加え，本年度の FD センターの活動をいっそう推進するためにご尽力をいただいた FD センター長の吉田浩之先生，そして，センター運営委員の先生方，学校教育臨床総合センターの品川仁美さんに心より感謝申し上げます。

2017 年度　群馬大学教育学部 学部・附属学校連携室

教員養成 FD センター運営委員会　報告書

2018 年 3 月
発行　　群馬大学教育学部　学部・附属学校連携室
教員養成 FD センター運営委員会
群馬県前橋市荒牧町四丁目 2 番地
電話（直通）　027-220-7385（事務局）
ファクシミリ　027-220-7381（事務局）